

「言語活動を活かした授業を目指して」

～伝え合い学び合う生徒をめざして～

保健体育科 廣瀬 尋理
北 恵子

1. テーマ設定の理由

本校保健体育科では、研究部の方針に従い、昨年度より言語に関する活動を活かした授業づくりの研究を行ってきた。

新学習指導要領の保健体育科の体育科の目標として、「運動の合理的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、知識や技能を身に付け、運動を豊かに実践することができるようにする」とある。これは、1学年及び2学年において、それぞれの運動が有する特性や魅力に触れ、3学年以降の自己に適した運動を選択できるようにするための基礎的な知識や運動の技能を身に付け生涯にわたって運動を豊かに実践するために示したものである。そこで、本校保健体育科でも、昨年度の研究テーマを言語活動を活かした授業実践とし、各学年の発達段階と競技の特性を活かしながら「伝え合う活動」を行い、言語に関する能力の育成に取り組んできた。

保健体育科で「伝え合う活動」とは、ゲームの作戦や技術を習得するまでの過程において、よりよい動きやフォームなど自分の持つ課題解決により近づけるためのポイントを確認し合い、何がどのようになっているのか検証し教え合うことである。そのため、見てもらう相手にどこのどんなところを見て欲しいのか、何と比べて欲しいのか、見るためのポイントを焦点化して取り組むことが、伝え合いをより効率の良いものとし、仲間と一緒に課題へ取り組んだ過程の達成感や取り組みの努力を共有することができるものになると考える。

また、他者に伝えるときには、適切な表現で説明することが求められる。運動の技のポイントや方向性などは、資料や実演などでことばなどの共有を図れるが、それぞれが感覚として身に付けた「やりやすいポイント」については、自分が感じ得た感覚を言葉に変え相手に伝えなければならない。そこで、動きを効率的に考察し表現する能力を伸ばしていくには、さらに伝えたい動きの様子を擬音化して、勢いや速さ、タイミングなどを表し、動かし方のニュアンスを伝える力も必要であると考え。

2. 言語活動に関する活動について

今年度は昨年同様に言語活動を活かした授業づくりを目指し、言語活動をより円滑に行うために3つのポイントをおいている。①技のポイントの資料提示 ②見つけたポイントキーワード化 ③見るポイントを焦点化である。そして、自己評価や相互評価にも共通理解が図りやすくするために、ワークシートを技のコマ送りを掲載したり、HS カメラで撮影した動画で検証したりできるようにした。視覚的な資料やカメラを使って授業をすることによって、生徒の動機づけの向上はもちろんのこと、自分の考えをより明確に動きの中で見て欲しいポイントを表し伝えあえるようになった。一瞬にして動いていく過程をスローな映像や静止画にして相手に見える形で提示することで、伝える相手も根拠を持ってはっきりとどうしたらよいのか、理由を言葉で説明することができるようになっている。また、友だちの考えやアドバイスが理解しやすくなり、コミュニケーションが円滑になっている。そして、自分が実技している姿を客観的に見ることで課題に対する意欲の継続や、練習の成果がダイレク

トに読み取れることで達成感の充実が図れている。

3. 言語活動の評価について

体育の言語活動においては、練習などの活動中のつぶやきや相手に対するアドバイスも評価の対象とするため、友だちからもらったアドバイスの記録や、表現に使った身振り手振りも一種の言語とし評価していきたい。そのためには、発表の機会を設けることはもちろんのこと、授業中の会話や声かけに教師が意識を向け、発表に現れない言葉に対してもアンテナを高くして聞き取っていただけるようにしたい。また、個人のワークシートへの記入等でも、動きのポイントの書き込みと振り返りを、次の時間に良い言葉や表現などを共有していくようにしたい。

4 実践

(1) 授業実践 I

①指導のポイント

球技、特にゴール型の授業では、作戦を決めて実践を行い、その後話し合いをして技能を高めていくことがよく行われるが、目まぐるしく状況が変わる中で求められる事が多いため、運動を想起したり、何から話していいか分からなかったりと効果的な話し合いが行われないことが多い。今回はそのことを踏まえ、より焦点化を図るため、バスケットボールの3対3でオフェンスに絞り、さらに5つの動きから選択し攻めるということを行った。その5つの動きは理論的に攻めることができるということを前時で確認しており、もし上手くいかなかった時にはなぜか、どうすればいいのかということも知識として習得しているため、実践のあとの話し合いが有意義になると期待して本時を実践した。

②本時の指導

実践した学年、単元、目標、本時の流れは以下の通りである。

3年男子 40名

単元 球技（バスケットボール）

目標 既習の動きを使ってより確実なシュート場面を作り出そう

本時の流れ

学習活動・内容	教師の指導・支援	時間
1. 準備運動・体操	出来るだけボールを使いハンドリングも含めた準備運動を行う。	5
2. シュート練習	ゴール下、ドリブルシュートを交互に行う。	5
3. 本時の課題を把握する	前時の5つの動きの確認と、今回はそれを用いて作戦をたて実践し、話し合いのなかで技能を高めていくことを確認する。(動きの言語化、ポイントの焦点化)	5
4. チームごとに作戦をたてる	作戦ボードを利用し、作戦を立てる。その内容をワークシート(次項に掲載)に従って文字と図で記入する。	5

5. 3対3及び話し合い	(チーム内での動きの言語化, ポイントの焦点化) 3対3の実践をコートで行う班, そしてそれが終わって話し合いを行う班に分かれ, 各自課題に取り組む。 話し合いではワークシートに従い, 何が良かったか, 悪かったか, どうすれば良かったかを前時に習ったことを踏まえて話し合いを行う。(情報の発信と共有化)	2 5
6. まとめ	各班でどのような実践をし, 話し合いをしたかを聞きそこで各班の高まりや発見などを確認する。	5

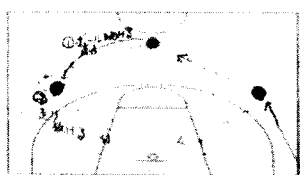
【言語活動を活かした授業場面とその評価】

既習の事項を活用し, 3対3が上手くいったのはなぜ上手くいったのか, そうでなかったものはなぜなのかを検証させた。前時までの既習の事項を使い, 理論的に記述し話し合っているかを評価とした。

◆今回の授業実践の評価基準表

活動	形態	十分満足できる状況	概ね満足できる状況	支援
既習の内容を使って, より良い作戦について考えよう。	ワークシート上	既習事項を使って理論的に記述している。	既習事項に触れながら自分の考えを記述している。	選んだ動きの特徴について解説し支援する。
	話し合いの場	既習事項を使ってチームの仲間に対して作戦ボードを使うなどして理論的に説明している。	既習事項に触れながら自分の考えを説明している。	選んだ動きの特徴について解説し支援する。

1. 本日の作戦(意識すること)を図や文字で整理しよう。



パスアウトランを止後に
ハンドオフをして攻めに
つなげる。
・相手とボールを手渡す。
・相手視線にとらなれないように
この作戦を実行しやすくなる。

2. プレーを終えて良かった点, 悪かった点を1つずつあげてみよう。

良かった点
・パスアウトランの意識が
ありました。
・ハンドオフがスムーズに
つなげられました。

悪かった点
・パスアウトランの意識が
ありません。
・ハンドオフがスムーズに
つなげられませんでした。

3. なぜ良かったか, どうすれば良くなるかをまとめよう。

良かった点
・パスアウトランの意識が
ありました。
・ハンドオフがスムーズに
つなげられました。

悪かった点
・パスアウトランの意識が
ありません。
・ハンドオフがスムーズに
つなげられませんでした。
・相手の動きが予測できず
・相手のパスが予測できず
・相手のパスが予測できず
(相手パス)

以下の点できていますか? ・自分の選んだ動きの特徴を理解し, 理論的に分析している。
・攻撃の連続性(運動量)の観点から分析している。

4. 次の作戦(意識すること)を図や文字で整理しよう。



パスアウトランを止後は
空いている位置に入って
1対1などをして得点に
つなげる。

ワークシートの流れ

1. 本日の作戦(意識すること)を図や文字で整理する。
2. プレーを終えて良かった点と悪かった点の原因を考える。
3. 次の作戦(意識すること)を図や文字で整理する。



*3対3実施の場面



*ワークシート記述及び話し合いの場面

③成果と課題

前時の内容を使って話し合うことで前時の理解の深まり、技能の定着が生徒の言葉やワークシートの記述、またコート内でのパフォーマンスから伺えた。前時に知識の部分で時間を割いたため、話し合いも、ただ良かった悪かっただけではなく、どうすればいいのかというところまで話し合いが出来る班が多く見られた。しかし、話し合うことによって最終的に技能の高まりを目指すという意味でも、今回の目標でもある「多くのシュート場面をつくる」ということを客観的な指標で評価することで話し合いの効果も評価できるのかと感じた。具体的には3対3でシュートにまでたどり着けた回数や、その回数と成功率の伸びなどである。そのような技能の高まりも記録させ子どもたちの話し合いのフィードバックの材料としていきたい。

またおおよそ上手く話し合いが行われていた反面、班の中では話し合いについていけない生徒も存在したことは否めない。そのような生徒には以下の3つの問題があると考えられる。

ア. 前時の5つの動きに対しての理解が浅く、知識の面でつまづいている生徒。

イ. 動作を言語にして話したりすることの出来ない生徒。

ウ. 自分が行った運動について想起出来ない生徒。

アの子に対しては教師がアンテナを張り積極的に支援し理解を深めさせ解決していくことがおおよそ可能である。またイ、ウについても同様であるが、イについてはアドバイスの観点になるようなポイントをより焦点化させたり、用語等の知識を掲示物などで定着したりと工夫ができる。ウについては教師の支援で解決が可能な面もあるが、運動時から話し合い時まで付き添うには限界がある。視聴覚機器を利用することもあるが、デジタルカメラやビデオカメラであると球技等の集団競技の場合、どうしても画面が小さく分かりづらい。また、テレビなど大型の機器につなぐとなると手間がかかり運動量の減少も考えられる。様々な実践のなかで兄弟チームのようなものを作成し、互いのチームを見合うという例も見たことがあるが、自チームの作戦だけでなく兄弟チームの作戦の理解という大きな負担がかかるし、これも結局は運動を想起する力が必要である。やはり生徒たちに運動を想起させる手間のかからない視聴覚機器の導入は不可欠である。このような問題に対して最近普及してきたタブレット PC などの利用も今後視野にいれ、子どもたちの効果的な活動の環境を整えていきたい。

(2) 授業実践Ⅱ

①指導のポイント

今回は器械運動の「マット運動」において、より滑らかに技を習得するための練習や、視覚的に観察したことのポイントを絞って相手に伝え合う言語活動を生かした授業づくりを目指した。また、授業の終わりには個人の振り返りにおいてワークシートへ「書く」作業を入れ、形成的な評価を意識した観察や振り返りを行った。

言語活動のポイント

- ア. お互いの課題を伝え合いグループの仲間に観点を絞って見てもらうようにする。
- イ. より良くするためにアドバイスの基準となるタイミングや様子の伝え方（ワード）などを、事前に学習し共通理解を図り伝えやすく伝わりやすい環境をつくる。（ワークシート）
- ウ. カメラなどを使い、アドバイスを伝えるときに視覚的にも根拠をはっきりさせて理解を深めやすくする。

②本時の指導

実践した学年，単元，目標，本時の流れは以下の通りである。

1年女子（1・2組 40名）

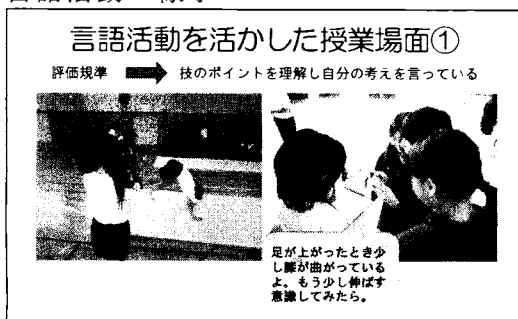
単元 器械運動（マット運動）

目標 自己の課題をグループで協力して練習しよう。

本時の流れ

学習活動・内容	教師の指導・支援	時間
1. 準備運動・体操	・班ごとに体操，準備運動（ストレッチ）のかかわり方を見て声かけを行う。	10
2. 基本の技の確認 倒立・・・補助の仕方	・技のポイントを確認し，修正するときに使ったら良い言葉（ワード）の確認をする。	10
3. グループ活動	・各自の課題をグループで確認させ場の使い方の助言をする。	20
4. 振り返り	・できたポイントや残された課題について具体的に書かせる。	5
5. まとめ	・友だちの良かったアドバイスを発表させて共通理解をさせる。	5

・言語活動の様子



ハイスピードカメラで、お互いの課題ポイントに焦点をあて、具体的なアドバイスを送り合い、次の練習に生かす言葉のやりとりができていた。

映像があることで、理解が深まりやすく活動も円滑にすすんでいた。

言語活動を活かした授業場面②

評価規準 ➡ 自分の課題をとらえ
技のポイントを記述している



倒立がうまくできなかった。
次は、膝を高くお尻を上げる
ように勢いを付けてトライ
したい。



倒立のとき、
マットをしっかりと押し
て、下を見るように
したい。



◆ 今回の授業実践の評価基準

学習活動	形態	十分満足できる状況	概ね満足できる状況	支援
・授業の振り返り 学習した技のポ イントを振り返 ろう。	ワークシート	自分の課題を明らかにし、次時の取り組むポイントが具体的に記述されている。	自分の課題をとらえ技のポイントを記述している。	自分の課題を確認させ資料と一緒に確認し支援する。
・自己の課題をグ ループで協力し て練習しよう。	練習の場面	グループの仲間に、課題とするポイントで、どうしたらよりよくなるか具体的にアドバイスを送っている。	技のポイントを理解し自分の考えを言っている。	課題となっている場面を確認し、一緒にポイントを確認し気づきの支援をする。

③実践記録

ワークシートに、マット運動のそれぞれの技をコマ送りにした物を印刷し、考えたことや練習の中で気づいたことや友だちがくれたアドバイスから得たコツなどを書き込んだりする形式を使用した。自分が課題としているポイントには赤で記入をし、自分が一番課題とするところをはっきり明記することで、練習への意欲付けもできた。練習時にも、友だちに見ていて欲しいポイントが焦点化でき、練習時のコミュニケーションも円滑に行えるようになっていた。また、技のポイントを書き込むシートを使うことで、自分の取り組みを整理するために考えを書き込めるようになってきた。

(3) 授業実践Ⅲ

①本時の指導

1年女子(3・4組 40名)

単元 バスケットボール (パス&シュートゲーム)

目標 チームでパスをつなぎシュートゲームをしよう。

評価の観点及び規準

・状況に応じたパスを出し、動いてパスを受けることができる。【技能】

②言語に関する活動の評価について

どのような動きをすればパスがつながりやすいか「技術のポイント」を考え、意見交換をしながら練習し、ゴールまでつなぐためのチーム力向上を目指した。運動が苦手な生徒へチーム内のアドバイスやゴールを目指すときに必要な作戦も互いに言葉で確認しながら練習に取り組んで行く。また、言葉にしない行動の表現もゲームには必要であることを理解させ、自己の振り返りで、パスと同様にボールを持っていない人の動きがゲームでは大切であることに気づき、それを記録できれば課題も明らかになり、今後の練習の目標に反映させていけると考えた。

本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援	時間
1. 集合・整列・あいさつ	・健康観察と準備運動の動きを確認する。	10分
2. 準備運動, アップドリル ・シュートゲーム(グループ) 練習3分, ゲーム1分 ・パスゲーム1分(グループ)	・一つ一つの動作でボールに対する手の感覚を意識して取り組むように確認する。 ・チームに声かけをして記録に挑戦する雰囲気高める。	
3. 本時の内容を確認		5分
4. ゲーム練習① 3対2のパス練習をする。	・守りが加わることで、既習のパスをつなぎゴールまで運ぶにはどんな動きが必要か、考えさせて練習に入る。	25分
5. ゲーム練習② ハーフコートで3対2ゲームをする。	・パスゲームを通して、動きの技術ポイントを見つけるように確認する。 ・パスがうまくつながらないときは、ボールを持たない人の動きにポイントを向け、グループで確認するように声掛けをする。	
6. 振り返り	・学習カードに本時の振り返りを記入する。	5分
7. まとめ	・気づいたことを発表し合う。	5分

③実践記録

生徒一人一人にできるだけ多くボールに触れる時間を持つように工夫をした。その中で、グループ毎にシュート練習をかねて回数を競わせるゲームは、ドリルの数値目標の設定ともなり、授業への意欲向上が図れた。

寒い時期の球技(バスケットボール)の実技授業ということもあり、言語活動を意識しながらも運動量の確保も考慮して授業を構成した。授業の流れの中で、いかに生徒の思考の流れを止めずに考える場面を設定するかグループにより差がみられた。グループで言語活動をより円滑にするためには課題をもう一度考え整理してから、また練習に取り組むフィードバックのタイミングが見極めのポイントだと感じた。

④成果と今後の課題

今回はマット運動とバスケットボールにおいて、グループで協力して課題解決をしていけるように、技を習得するためにどのような補助が段階的に必要か一斉指導で学び、共に高め合うための手立てを学習できた。そのため、より良い動きに高めるために友だちの助けを要求し、できるためのアドバイスをグループ内で伝え合う姿が多く見られた。まだ感覚で得た言葉を伝えられる生徒は多くないが、HSカメラを利用することで友だちの考えやアドバイスが理解しやすくなり、言語活動も円滑に行えるようになった。

バスケットボールのように自分たちのチームだけでなくディフェンス（守り）の動きも考えて作戦を話し合うためには、ワークシートで考えをまとめることも大切だが、より具体的な操作用具（ボード）が必要だと考える。映像の活用とともに生徒の円滑な思考の流れを考えた教材・教具の工夫がもっと必要であると考えます。

5. 成果と課題

成果としては2つである。1つ目は視聴覚機器の利用やそれによるフィードバック、またはグループやチームで自他の動きについてフィードバックすることによって自分の動きはもちろんのこと運動に対する興味や意欲が向上したと思われる。また様々な体の部位に気づきをもつことで運動のコツをつかむことを感じる事ができた生徒もいたように感じる。

2点目は自他の動きに対する気づきが多くなった点である。ただ「よかった」「悪かった」「頑張ればできるよ」という話し合いではなく、自他の動きに対しての詳細な気づきが増した話し合い、聞き合いになってきており、それがまた次の練習や新たな技能構築への手助けにもなっていたと考えられる。

また課題としては2つである。1つ目は運動量の確保である。運動とそれを基にした話し合い、聞き合いのバランスがとても大事であることを改めて再認識させられた。子どもが気づいたことを技能として定着できる運動量と、その新たな技能を手助けする情報としての話し合いのバランスを子どもたちを見ながら授業を考えていく必要があると感じた。またそれをその話し合いを支える教材、教具の整備、工夫も同時に必要である。2点目は自分たちの話し合いが効果的だったかを評価する指標を、子どもたちに分かりやすいようにフィードバックする方法を考える必要があると感じた。実践Ⅰでも述べたが、特に集団競技において必要であると思う。そのために教師が明確な目標を示す、例えばオフェンスはシュートするために動くなどの目標を示すことで、シュートまでいけた回数が話し合いと結びつけば子どもたちにとって分かりやすいのではないかと思う。種目によってそのような形で自分たちの活動と成果を結びつけるものが必要であると感じた。

今後は以上のようなことも踏まえながら、学年ごとの生徒の実態を把握し、もう一度各単元のはじめに全ての生徒に身につけさせたい基礎的・基本的な知識、技能の段階的な整理と、それに基づいた評価規準の見直しをしていきたい。